「１８世紀オスマン帝国における近代化
－アフメット・レスミーを手がかりに－」

南・西アジア課程トルコ語専攻 4 年

佐藤　将人

＜目次＞

はじめに・・3

第一章：アフメット・レスミーの生涯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

（１）若年期のアフメット・レスミー

（２）新しいパトロンの模索

（３）ウィーンへの派遣

（４）ベルリンへの派遣

（５）戦時中の経歴

（６）晩年のアフメット・レスミー

第二章：アフメット・レスミーの著作とその主張・・・・・・・・・・・・・・・・14

（１）1769 年ハリル・パシャへの提言

（２）1772 年ムフシンザーデ・メフメット・パシャへの提言

（３）『考察の概要』

おわりに・・25

はじめに

1683 年、スレイマン 1 世のウィーン包囲以来、154 年ぶりにオスマン軍がウィーンを撤退すると、ローマ教皇の呼びかけによって神聖同盟が結ばれ、ヨーロッパ勢力によるオスマン帝国への反撃が始まった。その結果、1699 年にカルロヴィッツ条約が締結されることになるのだが、これ以降、何世紀にも渡ってキリスト教世界を脅かし続けたオスマン帝国が衰退し、西洋との力関係が逆転していくことになる。

このオスマン帝国にとって屈辱的な条約が締結されたことによって、帝国内部でオスマン帝国とヨーロッパの違いを模索する人々が現れた。彼らは帝国の改革を西洋化の方向で進め、オスマン帝国の改革を目指し始めた[1]。

18 世紀は戦争が断続的に行われる一方で、西洋諸国へ外交使節を送り、ヨーロッパの国際関係の実態や諸国の軍事力を知ろうとする努力の始まった時代でもあった。

本論では、このような変革期を生きたオスマン朝の官僚アフメット・レスミーを扱う。アフメット・レスミーを扱う理由は、彼がウィーン・ベルリンという二ヵ国の都市に使節として渡り、オスマン帝国と西洋との違いを認識し、報告したことによる。そしてその著作は、オスマン帝国の西洋化に少なからず影響を与えていると考えたためである。

本論の構成は、1 章でアフメット・レスミーの生涯について言及し、2 章ではアフメット・レスミーが政治家としてオスマン帝国に精通していたという事実や、使節としての経験から来る主張を彼の著作とともに紹介し、オスマン帝国の西洋化に対してアフメット・レスミーの主張がどのように貢献したかを考察する。

なお、本論を作成するにあたり、Virginia H. Aksan, *An Ottman statesman in war and peace: Ahmet Resmi Efendi 1700-1783*[2](以下 Aksan と略記)を主たる情報源として利用した。

---

[1] 新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001、7 頁

[2] Virginia H. Aksan, *An Ottman statesman in war and peace: Ahmet Resmi Efendi 1700-1783,* E. J. Brill, Leiden・New York・Köln, 1995

第一章：アフメット・レスミーの生涯

（1）若年期のアフメット・レスミー

アフメット・レスミーは 1694（もしくは 1695 年）[3]に地中海中央のクレタ島のレスモという町で生まれた[4]。彼はコーランについて学び、科学、書簡の技術、書体、文語の様式などの知識を得ていった。彼は 1734（もしくは 1735 年）にイスタンブルを訪れ、コーランの注釈や法体系、言語学、文法、コーランの内容や様式、詩を研究したという。

オスマン政府の一員となるためにはパトロンを持つことが不可欠であった。オスマン帝国の高官たちは、権力を強めるために、才能のある若いオスマン人を世帯に入れることで支援し、更に自分の家族と結婚させることで関係を強めていた。それは、帝国において大宰相がスルタン家に婿養子として入るという慣習を反映している。18 世紀には、この慣習は広く広まり、中央政府と繋がりのある高官の家系に婿養子として入ることで、政治の世界に入ることが可能になるということを表していた。

イスタンブルを訪れたアフメット・レスミーは、自身の証言によればパトロンと縁組するのに 3 年かかった。Sefinet[5]の中で彼は「私は 1737 年に晩年の Hac Mustafa Efendi の被保護者になった。側近としての時間が経つにつれ、彼の執政室における高い地位の書記となり、1747 年に彼の義理の息子になった。」と述べている[6]。アフメット・レスミーはムスタファ・エフェンディと縁組することで、書記官長を務めていた著名な知識人の家族の一員となり、政治家への道を歩んでいくことになった。

---

[3] 多くの文献では 1700 年とされているが、アフメット・レスミーの親しい友人ムラディの文献 Silk al-Durar fi A'yan al-Qarn al-Thani 'Ashar には 1694 もしくは 1695 年と記されている。Aksan, p.1

[4] アフメット・レスミーの家柄については父親の名前が「イブラヒム」であること以外知られていない。Aksan, p.2

[5] 1749 年頃に書かれた、1744 年までの書記官長の伝記で、後にスレイマン・ファイクによって 1804 年まで続けられた。Aksan, p.224

[6] Aksan, p.24.

（2）新しいパトロンの模索

しかし、ムスタファ・エフェンディが 1749 年 9 月にこの世を去ったことによって、アフメット・レスミーはパトロンを失った。この後数年、オスマン帝国政府において、彼が重要な役割を果たしていたという記録はほとんどないという。次に彼を明確に確認できるのは、1754 年 7 月 28 日に、Sergi　Nazırı[7]として一年間の任命を受けたことだ。Sergi　Nazırı に任命されるまで、アフメット・レスミーはオスマン政府の業務によく熟達していた。Aksan によれば、アフメット・レスミーは知識と記述の能力のため、文書局の中で高く評価されていった。8 ヶ月間無職であったが、アフメット・レスミーは何もしていないわけではなかった。パトロンの死から 8 ヵ月後、彼の初めての作品、歴代の書記官長の伝記集である Sefinet を著している。アフメット・レスミーは、Sefinet を書く理由が二つあると述べた[8]。一つ目は書記官長の模範的生活の案内書を編集すること。二つ目はアフメット・レスミーのパトロン、故ムスタファ・エフェンディへの敬意を表すことである。Sefinet の内容はムスタファ・エフェンディのみについてではなく、全ての書記官長についての作品があるが、最後に書かれたものは、ムスタファ・エフェンディと同じ書記局で働いていたコジャ・ラグブについてのものである。

Aksan はアフメット・レスミーが Sefinet を書く副次的な理由として、彼の新しいパトロンを見つけることがあったであろうと推測している。これらの著作をコジャ・ラグブに献上し、称えることによって、知己を得、職を得ていったという。

（3）ウィーンへの派遣

1757 年、アフメット・レスミーはムスタファ 3 世がスルタンへ即位したことを知らせるために、ウィーンへの使節に任命された。このような報告のために、オスマン帝国が親しいキリス

[7] 宝物庫の収入と支出に関わる職。Aksan, p.218
[8] Aksan, p.28

ト教の国に大使を派遣することは、典型的なパターンであった。アフメット・レスミーと彼の側近たちは、任命を受けておよそ 1 ヶ月後の 1757 年 12 月 2 日に出発した。

ウィーンへの旅はほぼ 3 ヶ月かかった。ウィーンへのそしてウィーンからの陸上での旅の描写や、マリアテレジアやその夫フランシスへ提出された公式の文書の詳細は、アフメット・レスミーの報告[9]において最初の部分に書かれている。報告の次の部分である「オーストリアの領土の詳細」には、ハプスブルク家の簡潔な歴史や、彼が報告すべきだと考えたオーストリアにおける業務の状態が含まれていた。1758 年 7 月 2 日、アフメット・レスミーは付き添いの者とともに船でウィーンを出発し、1758 年 9 月初頭に 9 ヶ月ぶりにイスタンブルに到着した。

帰国後のアフメット・レスミーは、1759 年 6 月に財務書付け役[10]（Maliye Tezkirecisi）に就いた。ウィーンへの使節を無事終えたことに対する評価か、パトロンの斡旋か、この任命は彼を政府財政上の要人であり続けさせた。次に、1762 年 6 月アナドル会計局長[11]（Anadolu Muhasebecisi）に任命された。翌年彼はベルリンへの使節となった。1756 年以降イスタンブルが、プロイセン - オスマン間の防衛同盟へ向けての交渉で支配されているこの期間に、彼が使節に任命されたのは、おそらく彼のオーストリアとプロイセンに関する知識のためであろうと Aksan は述べている[12]。

（4）ベルリンへの派遣

1763 年 6 月、ムスタファ 3 世はアフメット・レスミーをベルリンへの使節に任命した。オーストリアと対立していたプロイセンのフリードリヒ大王が、オスマン帝国との同盟を求め、1761 年に条約が締結された。その条約に次いで、プロイセンの使節が高価な寄贈品を持ってイ

---

[9] Viyana Sefaretnamesi：1757-1758 年のウィーンへの使節団に関する報告。Aksan, p.225
[10] 高松洋一「オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構」林佳世子・桝屋友子編『記録と表象　史料が語るイスラーム世界』（イスラーム地域研究叢書 8）、東京大学出版会、2005、193-221 頁の訳による。（208 頁）
[11] 高松、207 頁
[12] Aksan, p.62

スタンブルにやってきた。さらにフリードリヒ大王は、ヨーロッパの王たちの間で名声を高めるために、オスマン帝国の特別な使節を自身の宮廷に送るよう要求した。イスラムとカリフの栄光と名声を示すために、フリードリヒ大王から受けた倍の量の寄贈品を送ることが決められ、アフメット・レスミーがこの任務を実行するために使節として任命されたのである。

アフメット・レスミーの出発に先立ち、1763 年 7 月 24 日に 2 回の儀式が行われた。一つは手紙と宝物庫から寄贈品を大使の手へと移すため、二つ目は公式なスルタンによる別れの挨拶である。アフメット・レスミーには約 70 人の従者がついた。

アフメット・レスミーは 1763 年 7 月にイスタンブルを出発し、11 月初頭にベルリンに到着した。使節団はムスタファ 3 世からの手紙を提出し、外交儀礼を行い、フリードリヒ大王にスルタンからの寄贈品を贈呈した。

アフメット・レスミーがベルリンに到着したのは冬であったため、6 ヶ月間の滞在が余儀なくされた。フリードリヒ大王に招待され、アフメット・レスミーはポツダムを訪れ、彼の宮殿や軍事演習を観察した。

アフメット・レスミーは 1764 年 4 月 22 日に、フリードリヒ大王からムスタファ 3 世の手紙に対する返事を受け取るために、宮殿に招待された。そこでアフメット・レスミーが帰国の意志を伝えると、フリードリヒ大王は使節団への感謝と友好関係を継続していこうという意志を伝えた。フリードリヒ大王からの手紙を受け取り、使節団は帰国の途につくことになった。

1764 年 5 月初頭、アフメット・レスミーはベルリンを出発し、1764 年 7 月 14 日、約 1 年ぶりにイスタンブルに到着した。

アフメット・レスミーのヨーロッパに対する知識は、スルタンの命令によって派遣された 2 回の使節の結果として深まったと Aksan は述べている。特にベルリンでの長期滞在は、彼がヨーロッパ社会を観察するのに十分な機会であった。Aksan によれば、アフメット・レスミーはフリードリヒ大王の指導力や、側近との関係に感銘を受けたという。それを描写した作品[13]は

[13] Sefaretname-yi Prusya : 1763-1764 年のプロイセンへの使節団に関する報告。Aksan, p.223

この時代において独特であり、後のスルタン、セリム 3 世となる若い王子の周りの助言者に影響を与えたという[14]。　アフメット・レスミーが知識人に与えた衝撃を計ることは困難であると Aksan は述べている。彼の報告はもはや宮廷内に伝達されていただけではなく、公式の年代記に複写され、19 世紀には多く出版された[15]。この作品が多くの人に読まれたことによって、人々はオスマン軍と西洋（プロイセン）との軍隊の格差を感じたのではないだろうか。アフメット・レスミーのように公正な視点を持った者や、西洋への賞賛をするということは、この時代には稀であるため、この作品は評価されるべきであり、特にフリードリヒ大王や彼の統治に関する報告において評価されるべきであると Aksan は主張している。後にアフメット・レスミーは自分の知識を活かして、中央政界における指導者、そして大宰相への助言者となった。

（5）戦時中の経歴

アフメット・レスミーはベルリンから帰国後、1764 年 8 月には Mektupçu（大宰相との通信局の長）となり、外交問題に従事していた。翌年、1765 年 3 月 27 日の公式任命セレモニーで、Çavuşbaşı[16]に任命された。

1765 年から 1768 年の 3 年間、名声や外交問題における経験にも関わらず、アフメット・レスミーは、毎年のローテーションによって、局から局への移動を繰り返したため、一つの局で経験を積むことが不可能であった。彼は 1767 年 3 月 6 日に食房局（Mutbah Emini）、1768 年 2 月 23 日には造船局（Tersane-yi Amire）の長官となった。どちらも財務分野での職である。1769 年 3 月 8 日に第一日々出納簿局長[17]（Ruznamce-yi Evvel）に任命されたことから、Aksan はアフメット・レスミーには会計職の適性があったのだと判断している。その後、アフ

---

[14] Aksan, p.97
[15] Aksan, p.98
[16] 文書局の重要な職のひとつで、大宰相府長官 Sadaret Kethüdası（後の内務大臣にあたる職）の次の位（Aksan, p.212）
[17] 高松、208 頁

メット・レスミーは中央政界における第一人者となっていった。翌年 1769 年 11 月 21 日、アフメット・レスミーは Sadaret Kethüdası[18]に昇進した。しかし、彼の経験はこの仕事を続ける上で役に立たなかった。イヴァズパシャザーデ・ハリル・パシャが 1769 年 12 月 12 日に大宰相に任命されると、アフメット・レスミーは Sadaret Kethüdası の職から解雇され、第一日々出納簿局長に再任された。ここで注目すべき点はアフメット・レスミーが、この時期ハリル・パシャに 1769 年の軍事活動の混乱や管理不足に対する批判を、特に兵站に注目して提出したということである。この無骨さが新たに任命された大宰相に不快感を与えたのかもしれないと Aksan は述べている。11 ページに及ぶこの批判のための独特な原稿は、13 の事柄に分類される。

アフメット・レスミーは 1770 年まで第一日々出納簿局長の職を続けたが、その後突然、1771 年 2 月 22 日、Sadaret Kethüdası に再任された。アフメット・レスミーは道徳的であり、彼は以前この職に勤めていたため、適性や学識があったという。彼はその日から 1774 年の戦争の終結までその職を継続し、ムフシンザーデ・メフメットが大宰相に再任された後、軍隊や供給の再構築における重要な文書局の一員となっていった。そして大宰相の命令によって、ロシアとの戦争終結交渉のための意見書を作成するなど、アフメット・レスミーは中央政界における方向決定の分野で不可欠な存在であり続けた[19]。

1774 年 7 月、ロシアの総司令官ルミヤンツェフはムフシンザーデ・メフメット・パシャに平和条約の全権大使を任命するよう指示する手紙を送った[20]。オスマン軍はシュムヌにおいてほぼ完全に包囲されていたため、ムフシンザーデ・メフメット・パシャに選択の余地はなかった。アフメット・レスミーは戦争を終わらせる条約の全権大使として、ムフシンザーデ・メフメットに仕えた。ルミヤンツェフの手紙についての議論で、交渉が適当であるという賛同を得た大宰相は、全権大使としてイブラヒム・ムニューブを任命するつもりであった。しかし彼は

---

[18] 注 15 参照
[19] Aksan, p.107
[20] Aksan, p.108

自分だけが大使になることを拒否し、アフメット・レスミーが第一の全権大使、イブラヒム・ムニューブが第二の全権大使に任命された。さらに、大宰相と司令官による署名と調印がなされ、キュチュク・カイナルジャ条約が締結された。アフメット・レスミーはこの条約に関して、『考察の概要（Hulasat ül-I'tibar）[21]』で以下のように述べている。「オスマン軍は全ての側を囲まれており、オスマン軍を援助するよう命じられていたタタール人も姿を現すことはなかった。しかも大宰相は病気で軍隊を指揮することができなかった。このような状況において、ルミヤンツェフの提案に対して対抗することもできず、降伏するしかなかった[22]。」

この条約によりオスマン帝国の勢力範囲は黒海北岸にまで縮小され、クリミア汗国の独立を認めることとなった。このような領土の変化は、オスマン帝国が過去 250 年ほとんど揺るぎない支配権を保ってきた地域において、ロシアの相対的地位を認めざるをえないという屈辱的なものであった。ロシア人は、自国の商船を南ヨーロッパと地中海東部沿岸諸国（レヴァント）の港に出入りさせる権利を得た。オスマン帝国が海峡の支配権を握って以来、初めて他国の船舶が黒海で貿易に従事し、ボスポラス海峡、ダーダネルス海峡を通って地中海に航海することができるようになった。同時に、エカチェリーナ女帝とその後継者たちは、オーストリアやフランス同様、オスマン帝国の首都に常設の大使館を設置する権利を認められ、オスマン帝国の主要な港には領事館も設置された。しかし最も重要なことはロシアがキリスト教徒の保護を口実にオスマン帝国の内政に干渉する道を開き、オスマン帝国を崩壊させる過程において最初で最大の成果を挙げたことである。しかし、アフメット・レスミーがこの条約を結んだことによって、オスマン帝国には平和がもたらされたのである。

（6）晩年のアフメット・レスミー

アフメット・レスミーがこのオスマン帝国史上最大の屈辱的な条約に調印する責任を請け負

[21] 1768-1774 年の露土戦争について書かれた歴史書。Aksan, p.221
[22] Aksan, p.166

った後、1775 年 8 月に食房局の長官に任命されてから彼の死の直前 1783 年までの間、彼の名前は年代記や公式役職名簿から消えてしまったという[23]。しかし、『考察の概要』が書かれたのはこの時期である。文体上は率直且つ単純で、構成は日誌として書かれており、多くの出来事の付け足しや修正をしている。これまで発見されている中で最も古い日付は、1781 年 5 月中旬となっている[24]。これらの作品は強く批判的で風刺的であり、世界中の図書館に 32 もの写本が残っていることや、戦争直後の広い普及から、Aksan は多くの読者を獲得していたと判断している。

アフメット・レスミーは Hulasat を書いた目的を、「過去の前例から警告として後の世界の指導者に役立たせること、至高の国家（オスマン帝国）に好意的に仕えた者を思い出させ、賞賛することである。私は神の慈悲の下、ペンをとり日々の出来事を永続する記録として正確にしたため、これを『考察の概要』と呼ぶことにする。」と述べている[25]。アフメット・レスミーはこのような執筆活動の一方、政治の場から完全に引退していたのではなかったようである。

キュチュク・カイナルジャ条約締結後も、オスマン帝国とロシアにおけるクリミア問題は解決されてはいなかった。クリミア汗国は王国として独立したが、同国首脳部は親露派と親土派に分裂していた。ロシアは親露派の人物をクリミア汗に選出するため、1778 年軍隊を派遣し、必要であればトルコとの開戦も辞さないことを公表した。このため露土間に戦闘の危機が生じたが、フランスが仲介に入り、キュチュク・カイナルジャ条約における曖昧な条項を再検討することになり、1779 年 3 月 10 日にアイナル・カヴァック条約が調印された。

この条約により、クリミアの問題は一時的に解決したが、親露派シャーヒン・ギライがオスマン帝国の領土である黒海西岸、東岸を脅かそうとするなど、クリミア国内は落ち着いてはいなかった。この時期アフメット・レスミーは 1779 年 9 月 7 日の会議など、クリミア汗国とオスマン帝国の間で開かれていた交渉の場に参加している。

---

[23] Aksan, p.108
[24] Aksan, p.109
[25] Aksan, p.109

またロシアとの条約に関する交渉は、1782 年まで断続的に行われていた。これらの交渉の少なくても 2 つに、アフメット・レスミーが出席していたことが知られている。これによって Aksan はアフメット・レスミーが非公式ではあるが、外交問題の助言者として政府に仕えていたと判断している[26]。1780 年 2 月 10 日の会議の記録によれば、アフメット・レスミーが、海賊やイギリスによる貿易の崩壊に関して黒海、地中海の開放を求める議論に参加したことがわかる。通商に関する交渉は 1780 年から 1781 年まで続いた。オスマン側の交渉長メフメット・ハイリ・エフェンディは、自分一人でその仕事をできないと気付き、政府に援助を求めた。このとき政府が彼の援助のために送った者たちには、アフメット・レスミーも含まれていた。彼らは 1783 年 6 月 21 日に署名された 81 の協定箇条を完成させた。

1782 年 10 月の終わりまでに、ロシアのクリミア占領は完成し、シャーヒン・ギライが再び汗となった。オスマン帝国はシャーヒンを汗として認めるか、戦うかの選択に直面していた。当時イスタンブルではハリル・ハミドが大宰相であり、アフメット・レスミーは、Süvari Mukabelecisi[27]として彼の側近になっていた。Ahmed Cevdet は著書の中で、ハリル・ハミドはアフメット・レスミーを賞賛し、役所へ戻したと述べられている[28]。これにより Aksan はアフメット・レスミーが戦争終了後、正式な官僚として働いていなかったと判断している。

オスマン帝国、ロシア間での交渉は続いたが、アフメット・レスミーはクリミアに関する交渉に最後まで関わっていない。1783 年 8 月 31 日にこの世を去ったからである。アフメット・レスミーを個人的に知るムラディは彼の晩年をこう語る。「彼の人生の最後は視野が狭まり、洞察力も衰えていった。様々な病気や老いが彼を蝕み、息子の死が極度に彼を悲しませた。その悲しみが彼を大きく苦しませた。彼は 1783 年 8 月 31 日にこの世を去り、ウスキュダルの Karacaahmet 墓地に埋められた[29]。」

彼はほぼ 40 年間忠義な官僚、鋭い批評家としてオスマン政府に仕えた。聡明で有名な書記

---

[26] Aksan, p.177
[27] 宮廷の騎兵への給与を支払う局の長。Aksan, p.218
[28] Tarih-i Cevdet（6vols., Istanbul, 1858-83）より。Aksan , p.180
[29] Aksan, p.184

官長ムスタファ・エフェンディの後援の下、1747 年に文書局に入り、18 世紀オスマン帝国の有力な政治家（コジャ・ラグブ・パシャ、ムフシンザーデ・メフメット・パシャ、ハリル・ハミド・パシャ）に仕え、助言した。Aksan は、アフメット・レスミーが徒弟から政治家を経て、監督する立場にまで登りつめたことは、彼がオスマン帝国の制度に精通し、ヨーロッパの合理化された文化を観察してきたことによって可能になったとし、そのことによって、時代遅れであるオスマン帝国システムを批判し、オスマン帝国における先駆者になったのであると述べている。

この章ではアフメット・レスミーの生涯における経歴を扱ってきた。次章ではアフメット・レスミーの著作とその主張を紹介し、その主張がオスマン帝国においてどのような影響を与えたかを考察する。

第二章：アフメット・レスミーの著作とその主張

1768 年から 1774 年のロシアとの戦争で大敗を喫したオスマン帝国であるが、オスマン軍が西洋の軍隊と比べて遅れをとってしまったのは、やはり軍事的な差が大きな問題であるであろう。アフメット・レスミーはその問題について、イェニチェリの無秩序化、ティマール制の問題、そして軍隊の統制の無さ、兵站、兵法に焦点を置いて述べている。また、彼は西洋との関係のあり方についても自身の意見を述べている。

この章ではそのようなアフメット・レスミーの主張を、1769 年のハリル・パシャへの提言、1772 年のムフシンザーデ・メフメット・パシャへの提言、1768 年から 1774 年のロシアとの戦争に対する批判を書いた『考察の概要』という彼の 3 つの主要な作品を紹介することで、明らかにし、その主張がオスマン帝国にどのような影響を与えたかを考察していく。尚、この 3 つの作品を選んだ理由は、これらの作品が西洋のシステムや考え方をオスマン帝国に取り入れようと主張しているものであり、オスマン帝国の西洋化に大きく影響を及ぼしていると考えたためである。

（1）1769 年ハリル・パシャへの提言

アフメット・レスミーは当時のイェニチェリの状態や 1769 年の悲惨な戦況を見て、オスマン軍における食糧などの供給や兵士の召集についての報告（Layiha）[30]を書き、新しく任命された大宰相ハリル・パシャに提出した。この作品の焦点はオスマン軍システムが完全に低下、崩壊していたことについてである。13 の論点のそれぞれが、オスマン軍の無秩序さについて言及している。以下がアフメット・レスミーの提出した報告の内容である。

[30] Babadağı における軍司令部の再構築や管理の必要性に関する記録。Aksan, p.223

① 軍が通過する町や村の保護について

前線への行程で通過する町が軍隊によって略奪されることを防ぐために、地方での連隊の司令官や軍曹を任命し、権力を与えるべきである。重要なことは、地方住民が軍隊に食料や家畜の飼料を供給してくれていることに対して、報いるということである。もし地方住民が保護されていることを理解すれば、食料は備蓄され、地方商業は成長するであろうし、軍の通行も順調になる。

② menzil[31]で行われる馬の供給について

乗りすぎや食料を十分に与えないなど、馬を酷使することが横行しており、馬は疲れ切って、飢えていたため、常に不足していた。アフメット・レスミーは、いくつかの解決策を提案した。それはまず、イスタンブルに派遣される使者には通常40～50人の付き添いがついていたのを、付き添いを20人にして、必要な馬の数を減らすこと。次に、宮廷側が前線に使者を送る場合、menzilに負担をかけすぎないように、使者一人につき5～10頭の馬を支給する。Menzilで馬が支給されず、行きと同じ馬で帰ってこなければならないことを理解すれば、馬を大事に扱うようになるであろう。使者は目的地に着いたら自分の馬の世話をするために代価をもらわなければならない。連隊の司令官に、menzilを指揮する者を任命する権利を与えるべきではない。地方の守備隊がmenzilの維持に関わる。それによって適切な数の馬が家畜商から連隊にあてがわれるであろう。

③ アナトリアからの軍隊について

軍司令官たちは正規軍を招集することが不可能であったため、代わりに「汚い泥棒の団体や浮浪者」に頼っていたという。彼らは戦場へ向かう行程の途中、略奪や破壊を繰り返すだけでなく、権利以上の賃金や賄賂を要求したり、国の財産を略奪したりもした。アフメット・レスミーは3人のパシャを例に挙げた。彼らそれぞれが必要以上の数の部下と戦場にたどり着いたが、3日もせずに部下全員が何の仕事もしないで去っていった。パシャたちは100人の部下す

[31] 帝国内の主要な道にある軍の停泊地。Aksan ,p.216

らも集められないことは明らかであった。なぜなら、この種の兵士は、町を破壊したり、自身の司令官を攻撃したり、重要な軍の供給を浪費するだけで何の役にも立たず、存在しないほうがずっとましだからである。また、大臣がいなければ軍隊は成り立たないと考える者もいた。アフメット・レスミーはそのような人々に、荷物を軽くして、自分の部下だけを連れて行動するよう勧告した。それはパシャにも財務省にも有益であろう。アフメット・レスミーはこの章で、オスマン軍の最も重要な問題である地方軍隊における管理の不足について指摘した。

④　封土所有者とティマール制[32]に関する問題について

ティマール制によって、兵士を派遣する義務のある者は、若い者は封土内で働かせ、年老いた者だけを軍隊に送った。スィパーヒーは 2 つのテント、4 人の従者、4～5 頭の馬やロバを連れてきた。その数は、スィパーヒー100 人に対し 2000 人の従者が付くこともあり、軍隊に負担を与えていた。しかしこのような従者はクルド人やジプシーであったので役に立たなかった。アフメット・レスミーはこのような者たちを、恩給を与えたり cebeli[33]に任命したりして、軍事活動から外すべきであると主張した。

⑤　キャンプに付き添っている最下層の者について

そのような者は 20000～30000 人といると見積もられており、あらゆる害を及ぼす可能性があった。彼はそれらの人々を軍隊から外すべきであると指摘している。アフメット・レスミーはテントを張る者に注目した。アフメット・レスミーは彼らがシリアの山から来たドルーズ派のキリスト教徒であると主張した。アフメット・レスミーは、1000 人は十分に働くであろうが、3000～4000 人はチップやコーヒーなどの報酬を要求してくるだろうと考えた。5～10 日もすれば彼らの要求はさらにエスカレートし、テントを張ったり片付けたりする際に更なる報酬を求めるだろう。彼らは現地の少女と結婚し、5，6 年もすればムハンマドの子孫であると主張しながら軍隊を作るだろう。このような問題の解決策としてテントを張る者を適切に配属し、給

---

32 スィパーヒーと呼ばれる騎士たちに国有地を分け与え、その分与地（ティマール）の徴税権を与える代わりに軍事奉仕をさせるという制度

33 本来領地所有者が国家に対する義務を果たすために送る兵士という意味であるが、Aksan はアフメット・レスミーが地方市民軍として使っているかもしれないと述べている（p.190）

料が適切に払われているかを確認し、きちんと管理し、従わない者は追放することであると主張した。それだけでは不十分なので、投獄し鞭を打つべきであるとも述べた。

⑥　荷物を運ぶ馬やラクダや水牛の酷使について

国家から名士や軍に支給された動物は、それらの責任を持つ使用人によってぞんざいに扱われ、彼らは動物の食料などを盗むこともあった。そのため健康な動物でも弱っていき、時には死んでいくこともあった。アフメット・レスミーはそのような支給された動物は、自身の所有物のように扱い、上官が 3 日から 5 日おきに状態を検査するべきであると提案した。

⑦　スィパーヒーや宮廷騎兵隊（silahdar）について

20000 人の名簿があるのにもかかわらず、1000 人しか存在していなかった。存在していない兵士の給与は高官や宰相に分配された。スルタンの永続的な軍隊を大宰相の側近として継続することは必要であるが、彼らが役に立たないのでは意味が無いとアフメット・レスミーは述べた。彼は 2 つの軍隊を再構成することは不可能だと悟り、彼がベルリンで見た作戦行動や規律を思い出しながら、新たな軍を組織するため、2000 人の最下層の人々を選び入隊させ、訓練し 2，3 日おきに閲兵することを薦めた。召集名簿に記録された兵士は、給与や利益を保証され、長い間活動していない兵士や引退した兵士の名簿も保管され、給与が支払われるべきであると主張している。

⑧　過度の従者ついて

アフメット・レスミーはここで軍隊における過度な従者の数に関する問題に戻った。ここでは高官たちを批判している。広大な領地を持っており、知識がほとんどない者は、名声を高めるために必要以上の住居、使用人、家畜を所有していた。これらの者は数多くの従者、家畜とともに軍隊に入り、日々の配給を要求し、軍隊に負担をかけていた。アフメット・レスミーはこのような人々が倹約することを強制されれば、軍の負担も大きく取り除かれると考えた。

⑨、⑩パンとビスケット（peksimet）について

Aksan によれば、アフメット・レスミーにとって、正規の兵士が十分に供給されているとい

うことが大きな関心事であることは明らかである。というのも、そうでなければ軍隊はなくなってしまうからだ。彼はまず購入代理人（mubayaaci）を非難した。彼らはパンではなく、原料であるキビやライ麦を支給した。次に兵站部（Nüzül Emini）とパン製造業者を批判した。彼らはきちんとしたパンは自分たちの利益のためにとっておき、不適当な原料で黒いパンを作っていた。供給が尽きると、彼らは小麦粉に土をまぜて不足分を補った。このパンを食べることによって、自然と多くの人が死んでいった。これらの浪費に続き、彼らは給与に関する不満を述べた。アフメット・レスミーはパンに関する問題はよく検討し、兵站部やパン製造業者の詐欺を防ぐために、確実に漂白された小麦粉を適切なバランスで加えることが必要であると考えた。例え金銭的に高くつくとしても、それが軍隊に快適をもたらすための最終的な方法であった。

⑪、⑫、⑬食料供給について

アフメット・レスミーの見た限りでは 1769 年の従軍中、食料機構の向上において何もなされなかったという。供給が十分であるときは、保有者はそれらを好きなように売っていた。アフメット・レスミーは、それらの食料を調節して分配することはそう難しくはないと考えた。米やコーヒー、ビスケット、穀物類は国の財産として徴発されるか、商人によって、市場価格で購入されるべきであると述べた。必要な量が高官や軍隊に行き渡ったら、残りは購入代理人か倉庫（貯蔵庫）責任者にゆだねられ、売るときには価格を規制することができる。特別の人間がこのシステムの監督者として任命され、違反者を罰する権力を与えられるべきである。規則ができあがれば、通商を妨げるものはなくなり、万人にとって有益であるとアフメット・レスミーは主張した。このテーマの仕上げとして、アフメット・レスミーは兵站部か会計局に属している者か、直接の仕入れ係を任命し、必要な食料供給を続け、不足や退蔵を防ぐべきであると主張した。彼は最後の主張として、市場取り締まり人（muhtesib）を軍隊の中で任命し、宿営地を巡回し、違反者と取り締まり罰する権利を与えるという、新たなシステムを強制することが必要であると述べた。アフメット・レスミーはこのような処置によって、以前はびこっ

ていた濫用の再発を防ぐことを望んでいた。

この報告は言語が簡潔であり、オスマン政府が直面している問題を正確に妥協なく分析しており、ありきたりな観点やスルタン中心の美徳や正義を捨て、新しいオスマン政治における記述を象徴していた[34]。このアフメット・レスミーが提出した報告は、オスマン帝国軍の問題点を取り上げ、その解決策を挙げたものである。この報告の中で具体的に表現されていることは、後のスルタンであるセリム 3 世やマフムト 2 世が行った改革の内容の基盤になっているのではないだろうか。というのも、この報告に書かれている内容は、イェニチェリ常備軍、現金による給与の支払い、ティマール制などの大きな問題に取り組み、改善することで、オスマン帝国軍が抱えている、兵士の招集や質に関する問題も解決されるという考え方であり、これらはまさにセリム 3 世やマフムト 2 世の行った改革の内容と一致するからである。つまり、ヨーロッパの軍隊を見てきたアフメット・レスミーが、オスマン帝国軍の抱える問題に対する解決策を与え、それを後のスルタンが行ったということは、アフメット・レスミーがオスマン帝国軍における西洋化に影響を与えたと言えるのではないだろうか。

次に、アフメット・レスミーの考えた西洋との関係のあり方に関する主張を紹介する。

（2）1772 年ムフシンザーデ・メフメット・パシャへの提言

アフメット・レスミーの二つ目の助言論文（Layiha）[35]は、ブカレストで終戦のための条約締結に向けての交渉の合間である 1772 年に書かれた。アフメット・レスミーによると、その目的は、「ムフシンザーデ・メフメット・パシャを啓蒙すること。そしてロシアを退去させることやロシアが引き上げるという期待が不可能であると主張し続けている人に対する答えを示すこと。」と述べている[36]。長く続き名声を得た国家は、衰退しつつある時期において、自分たち

---

[34] Aksan, pp.194-195
[35] 大宰相ムフシンザーデ・メフメット・パシャに向けて書いた政治的論文。Aksan, p.223
[36] Aksan, p.195

の領土に満足するべきであると彼は主張した。先見性のない支配者は、経験のなく野望や積極性に満ちた者に促され、間違った方向へ進み、名声や栄光の代償として自身の部下を苦痛へと導き、領土を失うだけでなく財産や豊富な土地を失うという悲しみに出会うであろうと述べた。これは同様の経験をしたことのある者たちには一般的に受け入れられたという。アフメット・レスミーは自分の意見を証明するために、過去 50～60 年の事例を持ち出した。

最初の事例は、サファヴィー朝の崩壊後に起こった空白地帯を巡るロシアとオスマン帝国の争いである。西からオスマン帝国、東からミール・ヴァイス（アフガン族の長）、北からロシアが崩壊した帝国の領土を求めたが、20 年の戦争の後、ナディール・シャーの台頭とともに領土は以前の状態に戻った。その後、ナディール・シャーはオスマン帝国の 25 年にも及ぶカルスやイラクに関する問題を引き起こし、イランの土地や人々は没落していった。アフメット・レスミーが挙げた二つ目の事例は、1736 年から 1739 年のオーストリア‐ロシアの対オスマン帝国戦争である。オスマン帝国が東部に重点を置いていたという事実を利用して、オーストリア、ロシアはオスマン領土の西側に遠征したが、多くの困難の後に、オーストリア、ロシア両国はベオグラードを含む征服していた領土を諦めざるをえなかった。この二つの例をあげることでアフメット・レスミーは、無理に勢力拡大を望むことはリスクが高く、逆に領土を縮小する可能性もあるので、オスマン帝国もこれ以上の領土を望まず、西洋との争いを避けるよう警告したかったのではないだろうか。

アフメット・レスミーは次に、1768 年からの戦争における過去 4 年間のロシアの優勢は例外的で一時的であり、星の影響や指導者の死によって消え去るであろうと断言した。ロシアにおいて、この出来事にはいくつかの意見の相違があった。ロシア女帝には知識、能力のある者たちが付いていたにもかかわらず、ロシアは領土を拡大しすぎた。アフメット・レスミーはこの意見に対してロシアが地中海とグルジアを同時に攻撃したことを指摘して反論する人たちには二つの歴史上の事例を挙げて答えた。一つ目はスレイマン 1 世の領土拡張政策である。それは海軍総督セイディ・アリが指揮した、紅海におけるポルトガルとの長期間の争いや、スレイ

マン 1 世自身のイランへの侵攻、フランス王に対して援助を送りイエメンを再征服しようとしたことである。これら全ては最終的に何ももたらさなかった。セイディ・アリは軍隊を失い、オスマン帝国は決してイエメンを支配できなかった。アフメット・レスミーは、更に二つ目の例を示した。それはイルハン朝に関する事例である。彼らはダマスカス、アレッポ、ディヤルバクル、コンヤにある王朝を滅ぼしつつ、中央アジア、中東に勢力を伸ばした。特にフラグ（チンギスハンの子トゥルイの第 6 子）は多くの不幸を引き起こしながらも、アナトリアやエジプトを支配した。そのような過度の拡大により、フラグやその子孫は国内の反乱に対処しきれなくなり、チンギス・ハーン一族の支配は短期間で崩壊した。

この二つの事例を出してアフメット・レスミーが主張したかったことは、ロシアはポーランドに侵攻したことで満足すべきであったのに、オスマン領土を侵略し、地中海や、激しく揺れ動いていたグルジアに軍隊を送った。これらは全て利益をもたらすことはなく、次第に彼らを蝕んでいくであろう。多大な費用や、征服した国の生産や収入が衰退することによって、人々は不満を持ち、国は傷つきやすくなるだろう。地中海に軍隊を維持することは、距離の面でもコストの面でもあらゆる困難を生み出す。ポーランドを征服し、分割するためには、多くの兵士や供給が必要であり、多大な犠牲をもたらした。戦争によって、飢饉、疫病、被害が起こり、征服した領土を安定させるために送られた新兵は、これらの弊害によって失われ、最終的には国防が崩壊するであろう。彼の議論の結論は、オスマン帝国は十分に領土を守り、戦争に入らず国境内に留まっていれば、ロシアは条約を守り平和を維持せざるを得ないであろう。アフメット・レスミーがスレイマン 1 世やチンギス・ハーンという有名な英雄を例に挙げ批判したことは、読者を驚かせ、影響を与えたであろうと Aksan は述べている。そして Aksan は、アフメット・レスミーが外交や交渉を通じて、平和、国境の定義、権力（国力）の維持が必要であると考えているのはほぼ間違いないと考えている[37]。

アフメット・レスミーがこの報告で主張したかったことは、ある国が他の国に勝つというこ

[37] Aksan, p.198

とは必然的なことではなく、その国の資源や、国境を最大どこまで広げられるかを認識することによって起こるという点であるとAksanは述べている。

この報告でアフメット・レスミーが述べた、無理に領土の拡大をせず西洋と共生を図るという意見は、実際はすぐに動きとして見られてはいないように思える。

（3）『考察の概要』

1768年から1774年の戦争時の彼の作品である『考察の概要』にはフリードリヒ大王の軍事演習を見て、彼が印象を受けた内容が書かれており、その中でもアフメット・レスミーが後に取り組むことになった、軍の統制や兵法について描かれている[38]。アフメット・レスミーはこの作品で、当時の戦争における兵法について、以下のような提案をすることで批判的な報告をしている。

① 平和を求め続けながらも、戦争の準備は常にしておくべきである。

② 敵に直面したら、全ての軍隊を見せてはならない。それによって実際より弱いふりをするべきである。

③ 敵を出し抜き、日の出前に攻撃するべきである。

④ 総攻撃の前に、敵の強さを測るために予備の攻撃をするべきである。

⑤ 必要なときは少ない兵士を常に動かすことで、できるだけ多く見せるべきである。

⑥ 待ち伏せが可能である場所では敵の注意を数人の騎兵に向けさせるべきである。

⑦ 敵の偵察隊は追跡せず、入って来させ、正体を暴くべきである。

⑧ 捕虜を拷問にかけたり身代金を要求したりするべきではない。[39]

---

[38] Aksan, p.97
[39] Aksan, pp.168-169

列挙されたポイントから、アフメット・レスミーが好結果をもたらしたロシアの兵法を理解していたと、Aksan は判断している。兵法はヨーロッパの軍隊においては共通のものとなっていったが、軍事力や個人の能力を誇示するということが通例であったオスマン帝国の慣習にはなじみのないものであったという。Aksan によれば、アフメット・レスミーやこの戦争を経験した多くの者たちは、オスマン軍機構の有効性に関する疑問を投げかけることで、オスマン軍を合理的に発達させていくことを企てていたという。

アフメット・レスミーは『考察の概要』でも、常に平和を追求することの必要性を述べており、その考えは勝利しているときでも変わらなかったという[40]。彼は読者に過去の様々な例をあげることによって平和を求めることの利点を述べた。アリストテレスがアレクサンダーに助言した内容である、講和が可能であるときに戦うことは、好ましくなく、また許されざるべきであるという考えに従い、キリスト教徒は根本的な主義として平和を求めているとアフメット・レスミーは主張した。そのため、1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約を締結する際、ロシアの総司令官ルミヤンツェフはオスマン帝国に対して優位な立場にありながらも、講和を求めてきたのであるという。Aksan は、アフメット・レスミーが戦争の不幸や苦しみという自身の経験を引き合いに出すことで、政府の政策として平和の必要性や、その利点について読者に理解させようとしたのではないかと述べている。彼は同様に、お互いの兵力を確認するための手段として、交渉や同盟を通じて作られたヨーロッパのシステムに参加する方が賢明であると確信していたという[41]。

アフメット・レスミーによって挙げられた問題は 1780 年代までに、オスマン政治において一般的なものになっていったと Aksan は述べている[42]。しかしオスマン帝国文化を守ろうという集合的意志は弱まっていなかった。オスマン帝国の政治家は、軍事力によって作られた同盟

[40] Aksan, p.199
[41] Aksan, p.200
[42] Aksan, p.200

に基づいたヨーロッパの外交システムに参加することは、ヨーロッパの技術や価値を受け入れることを意味しており、オスマンイデオロギーに不可欠である帝国のイスラムシステムを蝕むであろうと考えていた。新しい世代の官僚も、ヨーロッパ式の軍隊の移入は責務であると考えたが、これによってイェニチェリの問題が解決できるとは考えていなかったという。しかし1789 年に即位したセリム 3 世は、結局イェニチェリの反乱によって失敗に終わることになったが、イェニチェリを廃止し、新しい西洋式の軍隊を作ろうとした。そしてセリム 3 世の死後1808 年に即位したマフムト 2 世は、漸進的な軍事改革を進め、イェニチェリを廃止し、西洋式軍隊「ムハンマド常勝軍」を設立した。そしてマフムト 2 世はティマール制も廃止した。こうして、アフメット・レスミーが主張していたイェニチェリ軍の廃止、統制のとれた西洋式の軍隊の設立、ティマール制の廃止が達成されたのである。

この章では、アフメット・レスミーが施設での経験や戦争など、ヨーロッパのシステムを見たことから起こった主張を著作とともに紹介した。それらは従来のオスマン帝国の体制に対する批判を述べており、新しい西洋の方法を取り入れようとするものであった。

おわりに

本論では、オスマン帝国とヨーロッパの力関係の逆転、過去に味わったことのない屈辱的な条約の締結などが起き、オスマン帝国にとってのターニング・ポイントである、18 世紀を生きたアフメット・レスミーについて論じた。ウィーン、ベルリンに使節として派遣されたことで、彼は西洋のシステムを学び、それをオスマン帝国に伝えた。西洋化を模索する者は他にも存在したであろうが、この時期において彼ほど影響を与えた人物はそう多くはないであろう。18 世紀において、オスマン帝国軍の衰退は重大な問題であった。彼は軍隊の問題に対して、人員確保や管理、統制、そして戦争における兵法までも提案した。それは西洋を真似るというそれまでのオスマン帝国にとって考えられないことであったが、それをあえて提案することでオスマン政府、そして後のスルタンに影響を与えた。

また、衰退しつつある帝国においてこれ以上の領土拡大をせず、現状に満足し平和を求めるように提唱したが、これはジハードを義務としているムスリムの国家において未知の観念であったに違いない。

以上のように、イスラム国家であるオスマン帝国に西洋から全く新しい未知の方法、観念を紹介したという点において、アフメット・レスミーが 18 世紀のオスマン帝国に大きな西洋化への道を示したのではないだろうか。

本論ではまずアフメット・レスミーの生涯を追い、次に彼が注目してきた軍事改革や、オスマン帝国に与えた新たな観念に関する主張を、著作を紹介することによって明らかにしたきた。しかし、彼がオスマン帝国に伝えたことが 18 世紀以降のオスマン帝国、トルコ共和国にどのように影響しているかを更に考察することが可能であろう。この点を次回への課題としてこの論文を終わらせることとする。

参考文献

日本語

・新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001

・高松洋一「オスマン朝の文書・帳簿と官僚機構」林佳世子・桝屋友子編『記録と表象―史料が語るイスラーム世界』イスラーム地域研究叢書８、東京大学出版会、2005、193-221 頁

英語

・Virginia H. Aksan, *An Ottoman statesman in war and peace: Ahmet Resmi Efendi 1700-1783,* E.J.Brill, Leiden・New York・Köln, 1995